
空はなぜ青いのか

野々宮ハルキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空はなぜ青いのか

【Nコード】

N2242L

【作者名】

野々宮ハルキ

【あらすじ】

西暦2205年。

発達した化学の力で成り立つ世界の中。

俺は彼女にであった。

たった5日の時間の中でも

俺達は確かに生きていた。

くプロローグく

「私、あと5日で死ぬんです」

だから、と彼女は続けた。

「私の恋人になってください」

それが俺と彼女の始まりだった。

空はなぜ青いのか

くプロローグく

西暦2115年。

人類は地球温暖化によって破滅の道を歩んでいたが、その問題に対して1つの答えを導き出した。

俺みたいな平凡な学生にはよくわからないが、簡単に言うと「空气中に漂う二酸化炭素を無害なものに変える」という単純なものだ。それを可能にするシステムをどこかの学者が開発してからと言うものの、人類は自分達の住む場所をそのシステムですっぱりと覆ってしまった。

それこそ、ドーム型閉鎖都市^{アルベイン}、最大のものは直径500km、最小でも直径50kmを越える。

アルベインは瞬く間に世界に広がり、日本でも15個以上は存在している。

そこに人々は引きこもり、外との交流は途絶え、この90年間アルベインから出てきた者は一人としていない。

もはや、1つのアルベインが1つの国家として成り立っているのである。

その中で人々がどんな暮らしをしているのかは知らないが、想像するに、化学の力によって物質を上手く循環させているのだろう。

ではなぜ、俺がこのように客観的にアルベインの話をしているのかと言うと、ただ単に、俺がアルベインの住民じゃないからだ。

アルベインが作られた際、そのような化学の力に頼りきった人類のあり方に異議を唱える者がいたのだ。

「人は自然と共に、自然に触れあって生きていくべきだ」

そう主張する団体、いわゆる《反アルベイン組織》。

しかし、組織の主張も虚しく、アルベインは作られた。

残った組織はアルベインに住むことを拒み、アルベインから離れた

場所で村を作り、今でもひっそりと暮らしている。

そのひっそりと暮らしているうちの一人が俺、綾崎拓美だ。

言っておくが、別に俺はアルベインが嫌いなわけでも、そこに住む人々が憎いわけでもない。俺の祖母と祖父が若い頃反アルベイン派であつたため、代々この村に住んでいるだけに過ぎない。

とうぜん、村の生活は楽なものじゃない。

資源はないし、食べ物も自給自足。

建物だってボロボロだ。

だけど、清んだ川は綺麗だと思うし、木々の緑を見ると心が癒される。

なにより、ここに住む人々の助け合って生きていく様を俺はなかなか気に入っている。

そんな村。

沢神楽が俺の住む場所だ。

これは、そんな沢神楽のある短くて長い夏の話。

俺はこの夏を決して忘れない。

「たくみ！」

「たくみにーちゃん！」

「抱っこー！」

「あ、ずるーい！」

「私も抱っこー！」

足元からわらわらと手が延びてくる。

「あーもう！うるせえな！今、電話してるだろーが！少しは静かにしろ！」

その手から逃れるように身を引き、子供達の声にかきけされないように必死に叫ぶ。

「おい、飛鳥！お前どこにいるんだよ！」

俺一人に子供達を押し付けて消えた悪友の沢田飛鳥に携帯を通して怒鳴る。

『はは、随分と苦勞してるみたいだね拓美』

笑いを含んだ爽やかな声に俺のイライラが急激に上がって行く。

「はは、じゃねーよ！どこほっつき歩いてるんだ！今日は俺とお前の当番だろ！」

携帯が折れるのではないかと言うぐらい握りしめる。

『んゝゝゝ残念。歩いてはいないよ。喫茶店で紅茶を飲みながら座ってるだけ。』

「もつと悪いわ！」

『そんなにイライラしていると血圧上がるよ？』

「誰が上げてると思うてんだよ、誰が・・・」

はあ、とため息をつく。

「で？」

『ん？』

「だから、何かあったのかって聞いてんだよ」

小さく息を飲む音が聞こえ、数秒の沈黙。

『すごいね、拓美は。なんでわかったの？』

「喫茶店は今日は定休日だからな」

そうゆうこと、と飛鳥が苦笑する。

『朝比が発作を起こしたんだ。いつものだから心配はいらないんだけど、念のために・・・ね』

「そうゆうことは早く言えよ。・・・仕方ねえから今日は許してやる」

『今度お茶でも奢ろうか』

「男二人でお茶なんて寂しいだけだろ」

飛鳥と俺が二人で並んでお茶を飲んでいるのを想像して笑い出しそうになる。

『確かにそうだね。じゃあ、克己も誘おうか』

「克己も男だろうが」

『あ、ばれた？』アホか、と笑ったところで、服の裾が引っ張られる感覚がしたので目線を下ろすと、怒られてしばらく静かにしていた子供達が痺れを切らしたようにこちらを見つめている。

「あー・・・じゃあ、そろそろ切るわ」

『そうだね。じゃあ、拓美。しっかり子供達の面倒見るんだよ』

「ああ、朝比ちゃんにもよろしくな」

回線が切れる音を聞いてから、携帯を閉じてズボンのポケットにしまう。

「よし。今日は何がしたいんだ？」

その声をきっかけに子供達が騒ぎ出す。

あれがしたい、これがしたいと騒ぐ子供達を見ながら、平和だなあなんて柄にもなく思った。

俺が住む沢神楽村は、他の村よりは随分と裕福である。

一家に1つはしっかりと畑があり、商店街にはそれぞれが育てた野菜や果物、海や川で取れた魚や貝。喫茶店や診療所まである。

山の上には学校もあり、村の中なら携帯もなんとか通じる。

だから自然と人が集まり、今では村としては日本一の人口を誇っている。

しかし、日本一と言っても精々200人程度だ。

もともと、反アルベイン派の人間は少数である。

そこで問題になるのは、家の手伝いができないほど幼い子供達の面倒だ。

学校が終わり、家に帰っても親は畑仕事で忙しいし、下手に遊ばしておけば大事な機械や資源に傷をつかかねない。

そこで、高校生と中学生はそんな子供達の面倒を見させられることになるのだ。

高校生と中学生は合わせて6人。

その中で、家の手伝いをしなければならないのが2人。

残りの4人で2人組を作り、ローテーションで10人の子供達の面倒を見ることになる。

たとえ2人と言えども、一度に10人の子供達の相手をするのは辛い。

それなのに今日は俺1人だ。

とうぜん

「あああ・・・疲れた・・・」
こうなる。

「拓美にーちゃん大丈夫？」

日が暮れて、子供達をそれぞれ家に送って行き、最後の一人である男の子が心配そうに俺を見上げる。

「ああ、大丈夫だ。それにしてもいつもお前らのパワフルさにはやられるぜ」

そう言つて男の子の頭に手を乗せてわしゃわしゃと髪の毛をかき混ぜてやる。

「拓美にーちゃんだつてパワフルじゃん！知ってるよ！あーゆうつて大人げないつて言うんだ！」

「なんだとー！」

生意気なことを言う男の子の髪の毛をさらにかき混ぜてやる。

笑いながら逃げる男の子がはつと気づいたように道の先を見た。その目線の先を見るとエプロンをつけた女の人が箒を持って、道に落ちた葉を掃いている。

女の人もこちらに気づいたのか男の子に向かって緩く手を振り、俺に向かって挨拶がわりにペコリとお辞儀をした。

「お母さんだ！拓美にーちゃん、またね！」

そう言つて男の子は手を振りながら一目散に駆け出した。

男の子が嬉しそうに母親に駆け寄つて、母親が愛しそうに男の子くしゃくしゃになった髪の毛を撫でる。

その姿がひどく眩しくて、背を向けて俺も家に向かって歩き出した。

「はぁ・・・」

なぜか憂鬱な気持ちになってしまい、重々しく溜め息をつく。
空を見上げると太陽の姿はなく、星がだんだんと煌めき始めていた。
早く帰らなければ、と目の前にある寂れた踏切に足を踏み出す。
村の外れにある俺の家は、この踏切を越えてまた5分ほど歩いたところにある。

学校からも商店街からも遠く、立地条件は最悪だ。

ちなみに、俺の家から一番近いところにある家まで歩いて20分か
かる。

「腹減ったなぁ・・・」

情けない音をたてる腹を押さえながら降りたままの遮断機を潜り抜
ける。

ジャリ

「ん？」

地面を踏みしめる音が聞こえた気がしてそちらを向く。

一瞬自分の足音かと思ったが、俺の足の下に広がるのは薄汚れてはいるが、コンクリートで舗装された道だ。

「・・・気のせいかな？」

そう思って一歩足を踏み出す。

ジャリ

ジャリ

気のせいじゃない。

俺は遮断機と遮断機の間。

つまり、線路のど真ん中で立ち止まり、闇に包まれた線路の先を見つめる。

人が通るために作られたコンクリートの道は遮断機の範囲にしか広がっていないため、その先にある線路の下は砂利道だ。

先ほどの、いかにも石の上を歩いてますと言っ音はそこからしか発せられるはずがない。

月の光しかない闇の中で必死に目を凝らす。

ジャリ

ジャリ

ジャリ

どうやら足音はこちらに近づいているようだ。

（まじかよ・・・）

言っておくが、俺は幽霊と言うものが嫌いである。
苦手な訳じゃなく、嫌いである。

ジャリ

ジャリ

ジャリ

（待て待て待て待て待て！！）

心の中で慌てふためく俺を無視して、足音の招待がゆっくりと月明かりに照らされて行く。

白い物が見えてー・・・

「ぎゃあああああああああ！ー！！」
「きゃあー！」

「・・・あ？」

きゃあ？

思いもよらない声に戸惑い、瞑っていた目を開く。

「・・・女？」

目の前には心底驚いたような顔をしてこちらを見上げる涼しげな白いワンピースを着た少女。

「あ、あの・・・」

少女はこちらを伺うようにおずおずと口を開く。

「はあああ。なんだよ、人間かよ・・・」

ほっとして胸を撫で下ろす。

落ち着いたところで、改めて少女を観察する。

薄い茶色の長い髪に、黒に近い茶色の瞳。

そこらへんにいそうなく普通の少女だ。

いや、厳密に言えば美少女だが。

しかし、この村の人間ではない。

「あんだ・・・誰？」

見たところ何も持ち物を持っていない。

ということは、この村に移住しようとする者でもないはずだ。しかもこんな村の外れにいるなんて怪しいことこの上ない。

「え、あの、私は・・・」

少女が困ったように目を泳がせる。

そんな反応をされると、自分が少女を苛めている悪者のような気分になる。

「いや、あのさ・・・別に怒ってるわけじゃねえし・・・」

日頃から幼なじみや子供以外の女と接することがないので、こういうときにどうしたらいいのか全くわからない。

（飛鳥なら上手くやるんだろうけど・・・）

頭に浮かんだ悪友の姿に頭が痛くなる。

「別に話したくないならそれでいいけど、こんな夜中に歩いてんなよ。早く家に帰れ」

このまま話していても怯えさせるだけだろうから強制的に話を終わらせる。

少し投げやりな言い方になってしまったがそこは仕方がない。

じゃあ、と言って背中を向けて家に向かって歩き出す。

先ほど潜った方とは反対側の方の遮断機を潜ろうと身を屈めた、その時。

「ないです」

闇の中に響いた小さな声。

驚いて振り替えると、少女が先ほどの場所から一步も動かず顔をうつ向かせている。

「家はありません」

「え・・・」

いきなりすることに驚いて、身を屈めた状態で固まってしまった。

「名前もありません」

うつ向いたままの彼女の声がだんだんはつきりして行く。

彼女が顔を上げてしっかりと俺と目をあわせる。

「だから、私をあなたの家に泊めていただけませんか？」

時間が止まった、ような気がした。

「は？」

「少しの間でいいんです！泊めてもらえるだけでいいんです！」

少女は未だに屈んだ状態でフリーズしてる俺に近づいて、胸の前で手を握りしめている。

「いや、ちよつと・・・」

「泊めていただいている間はお料理だって、お掃除だってします！」

必死に俺に頼み込む目の前の美少女の勢いについていけない。

「あ、お使い！お使いだつてします！」

そんなにお使いって大事なことだっただろうか。

いや、問題はそこじゃないだろう。

「他にも何かできることがあつたら私！」

「だから待てて！！」

俺の声に少女がビクリと震える。

「あ、えっと・・・別に怒ってるわけじゃなくて、とにかく落ち着けよ」

少女を安心させるように声を和らげる。

「あのさ、なんかわけがあるかもしれないけど、そうゆうのはまずいと思う」

「まずい・・・？」

少女は本当にわかつていない様子でこちらを見つめている。

普段は使わない頭をフル活動して適当な言葉を探す。

「だ、だから・・・えっと・・・俺は一人暮らしなんだ」

「そうなんですか」

だからどうした、と言うような顔で彼女はこちらを見つめ続ける。

「そういう・・・その、お、女が男の家に簡単に泊まるとか言うのはよくない・・・と思うんだ」「そうゆうものなんですか？」

「ああ」

「でも、私、簡単な気持ちでなんて言ってます」

何を言ってるんだこの女は。

「は？」

「本当に泊めていただきたいんです！ご迷惑なら少しの間とは言わず、一晩だけでもいいんです！」

お願いします、と少女が頭を下げる。

駄目だ、全くわかっていない。

簡単な気持ちで言うのが駄目なんじゃなくて、簡単に「泊めて欲しい」と言うことが駄目なんだとわかっていない。

これははつきりと言ってやらねばわからないだろう。

「だから・・・そういうのは恋人とかがするものなんだよ！」

「・・・恋人？」

「ああそうだよ！女が男の家に泊まるってのはそういうことなんだよ！別に俺が何かするってわけじゃないけど、そういうのはいろいろと困るって言うてんだ！」

少女から顔を背けてはつきりと言ってやる。

「恋人ならいいんですか？」

「そりゃ、恋人ならそんなくらい・・・」

「じゃあ、恋人になってください」

今度こそ時間が止まった。

「え？」

少女が胸の前で手を握り直して、真っ直ぐにこちらを見つめる。

「ちよつと待て、あんた・・・」

「私、あと5日で死ぬんです」

だから、と彼女は続けた。

「私の恋人になってください」

それが俺と彼女の出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2242l/>

空はなぜ青いのか

2010年10月28日07時00分発行